亀井南冥没後２百年特集

本年は亀井南冥（１７４３～１８１４）没後２００年の記念すべき年に当たります。また亀陽文庫の秋月設立40周年、能古島移転25周年の節目の年でもあります。

当館の母体である亀陽文庫は、北洋漁業の開拓に貢献した福岡市出身の実業家真藤慎太郎（１８８３～１９７１）が収集した亀井南冥一門の墨跡、書画を中心に１９７４（昭和49）年、朝倉市秋月に設立されました。１９８６（昭和61）年に財団法人化。１９８９（平成元）年福岡市・博多湾内の能古島に移転。２０１３（平成25）年公益法人化しました。

☆

今号は没後２百年特集として、『亀井南冥の「学規」』（２～３頁）と、朝日新聞中村俊介編集委員の寄稿『国宝金印のつまみ、ヘビかラクダか』（４頁）を掲載しました。

☆

バスで巡る旧跡訪問と浄満寺でのお茶席

特別企画として初のバスツアーを10月25日と11月15日の２回、次の要領で実施します。これまでも絵画展、講演会などを島外で行った実績はありますが、市内各所にある南冥ゆかりの地を貸し切りバスで巡り、専門家の解説を聞く催しは初めてです。

約５時間の行程。会費制ですが、バス料金、昼食の弁当代、お茶席のおもてなしを含みます。詳しくは同封した応募チラシをご覧ください。

《コース》**09・30地下鉄姪浜駅北口集合（バスに乗車）**→亀井南冥生誕地見学（姪浜）→福岡市博物館（百道浜・国宝金印見学）→東学問所跡見学（赤坂・藩校修猷館誕生の地）→西学問所跡見学（唐人町・藩校甘棠館誕生の地）→甘棠館劇場（劇団ショーマンシップの亀井南冥寸劇の鑑賞）→**12・00昼食（弁当を用意します）**→浄満寺（地行・南冥一門の墓所見学）→本堂で講話（前住職井浦順爾さん）→別室でお茶席（表千家吉田宗修社中）→**15・00現地解散**

カット写真は今年で22回目を迎えた能古中学校伝統の遠泳大会。＝関連記事５頁に＝。

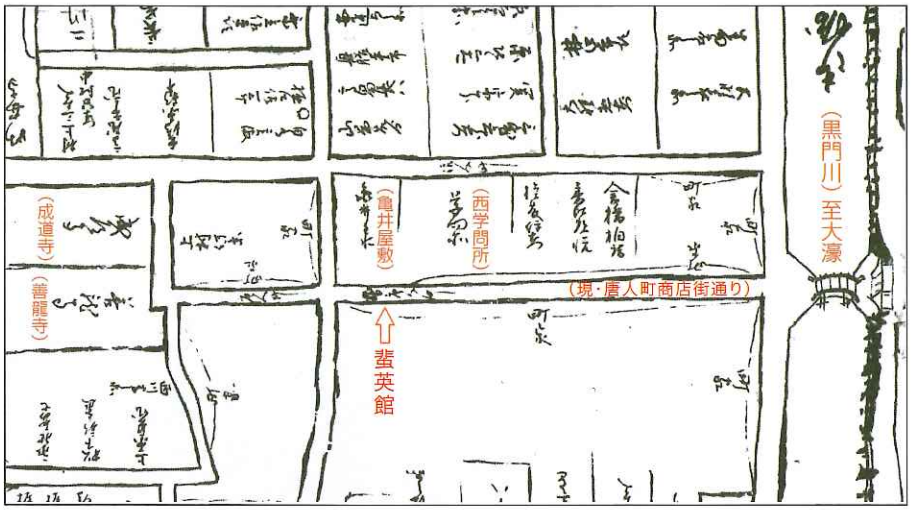
このほか本館で行われた同中学校の平和授業『海外引き揚げ者の歴史と博多の関わりについて学ぼう』に参加した生徒の感想文を６～７頁見開きで紹介しています。

亀井南冥の「学規」

※館便り第5号（平成2年7月発行）掲載の『亀井塾の学規』（町田三郎九大名誉教授）を引用して再構成しました。

蜚英館（ひえいかん）誕生

亀井南冥が福岡市の唐人町に、医業の傍ら学塾を興したのは1764（明和元）年、彼が22歳の時だった。この塾を蜚英館という。英才を広く世間に雄飛させるとの意である。



＜唐人町、亀井屋敷、西学問所の絵図＞
「能古博物館だより第33号から引用」
※1784（天明4）年から1798（寛政10）年の間に作成された絵図と推定される。

学塾として世に立つ以上、その目的や機構規則、教授の次第などは明確でなければならない。この時若き南冥は塾の本来あるべき姿を真摯（しんし）に考え「蜚英館学規」にこう語っている。

本来学問とは「成徳行道」（民を長ずるの徳を成し世を輔（たす）くるの道を行う）こそ要諦なのであるが、これが近頃ではすっかり忘れられ、訓詁（くんこ）ばかり言う学者と実務にのみ終始する政務家に分裂してしまった。つまり政治と学問とは遊離してはならないのである。

そして南冥は、事務を知って事業につとめ、心性を陶冶（とうや）して学問に通じるとき、はじめて真に世の中に役立つ人材が出来るのだと塾生に呼びかけた。

▽学課目12条

こうした目的が達成されるためには塾生としてのしかるべき順序階梯を踏まねばならない。学ぶべき学課目を南冥は次の12条とした。そしてここに種々の工夫を盛り込んだ。

（1）講説（2）会講（3）輪講（4）独看（5）作文（6）作詩（7）習書（8）習算（9）習制（10）習兵（11）幼儀（12）試業

いくつか詳しく説明しよう。（1）講説は教授や訓導による講義。これはごく一般的な講義の形式である。（2）会講は「塾生を会集し共に一書に就きて、その義を講究するなり」とある。あたかも今日のゼミのようであるが、実際はゼミ形式の討論会であり、進級テストでもあった。

亀井南冥肖像

▽亀井流ディベート「奪席の栄」

まず訓導（教諭）が上座につき塾生名簿に従って彼らに講義させ、その出来で名前の下に○×を付け勝負を記す。次に塾生から1人を選び、彼を質問者として難問を出させ、会衆が逐次自分の意見を述べ、一応終わったところで質問者が会衆各人の得失を判定し、これをさらに訓導が補正して○×を付ける。もし会衆がこの判定に不満なら、質問者と一方が降参するまで論争する。

論争が未決定、あるいはその他の解釈があれば訓導が経典に照らして教諭し、その後判定する。また逆に会衆側から難問を発し、質問者がこれに答え、訓導がその得失を判定し○×を付ける。

終了後、訓導が各人の○×を数えて勝負を決め、会衆の席次を改める。○多き者を進めて質問者とし「奪席の栄」とする。3度会講して席を奪われなかったら、句読師と同じ上席につく。

この討論形式の進級テストは、後に一時期亀井塾に学んだ広瀬淡窓により精密に工夫され、彼の日田・咸宜園で「奪席会」と称して昇級テストとして好評を得たものである。

▽テストはすべて応用問題

（12）の試業はテストである。これがまた変わっていて面白い。「諸生の習うところの業につきて、その工程を験するなり」というが、すべて応用問題でありその範囲も至って広い。たとえば設問は経史の疑義、財政の急務、富国強兵の術から陰陽災異の変、怪異出現の理、儒仏巫（じゅぶつふ）医のことに及ぶ。すなわち経典批判から社会事象百般に至ることがらすべてが設問になる。

ここからしかるべき問題を作って小紙に記入し、これを小箱に納めておく。試験の当日、塾生たちはこの小箱の中から1枚ずつ紙片を取り出し、そこの書かれている問題に直ちに回答する。むろん隣と相談してはいけない。ただし答案は漢文でも和文でもよい。論旨が通り、義理穏当なれば及第。甲乙丙が合格、丁は落第。このテストを三ヶ月に1度ずつ行う。刺激を与え学問進歩の励みとするとともに、諸般の問題に即座に対応できる能力を養うためである。

(3)の輪講は塾生たちが順番にかつて読んだことのある書物について感想や意見を表明する会。(4)の独看は塾生の自主学習。(5)、(6)の作詩、作文はむろん漢詩・漢文の修練である。(7)習書は「今その人を得ず、故にしばらくこれを闕く」というが、必ずしも初学者の塾ではない蜚英館にとっては、その要なしとしたのだろう。

残る(8)の習算、(9)の習制(10)の習兵(11)の幼儀の4科も「闕」。

以上の学課目12条。とりわけ会講、輪講、独看、試業には南冥の教育への並々ならぬ配慮や創意がうかがわれる。塾生たちはこれによってずいぶん鍛えられたことであろう。

＜修猷館学規＞　1784(天明4)年2月
漢文の「東館学規并題辞」(正文)と和文の「学規訳文」(意訳)がある。和文は初学の生徒に読み聞かせるためである。
※修猷館2百年史(1985年)より。

甘棠館も踏襲

こうして若き南冥の私塾「蜚英館」の経営はしごく順当に推移発展していった。江上苓州らの俊英も育ってきた。南冥の学才も年を追って世間に知られていった。ついに1784(天明4)年、42歳のとき、藩命を受けて西学問所甘棠館の館長の座についた。一介の町医者の子としては破格の出世であった。

(注)江上苓州＝亀井南冥の高弟。農家の出身。27歳で西学問所の副長になる。同所廃止後は武士の本領たる武技を専らとする。63歳で没。

藩校「甘棠館」は当然新たな「学規」が作られて然るべきだったが、南冥はそうしなかった。甘棠館の学規は、私塾「蜚英館学規」の序の部分を少し書き換えただけですませた。学課目その他全く変わりないのである。

(注)甘棠館＝館名は詩経の召南の章句「蔽芾甘棠勿剪勿伐」からとったもの。甘棠とは果樹の名で、小さな林檎のことである。

▽聴衆あふれ、槍が立つ

藩校開設の以前から南冥の学風は諸国に知られていたので、西学問所甘棠館の入学者は日増しに多くなった。そのために付近の町家や寺院は寄宿者が多く、断るのに困惑したと伝えられる。

南冥が講義する日は、聴衆が学館にあふれ、門内には槍が10数本も立っていたという盛況であった。槍が多く見えたというのは、供人に槍を持たせる身分の武士が多数の聴講者にまじっていたという状態で、西学問所の隆盛を物語る。

南冥は西学問所開設の前年、150俵に加増された。これは知行150石に相当する待遇であった。

※この項は「亀陽文庫のしおり　亀井南冥と一族の小伝」(編集・発行　庄野寿人)から引用しました。

修猷館との対比

一方、甘棠館と東学問所修猷館の学規を対比すると、甘棠館は清新さ、修猷館はオーソドックスが特徴だった。修猷館の訓導職は、福岡藩の儒学を家業とする儒学十二家がこれに当たった。即ち筆頭の武田家と筆頭次席の島村家に櫛田、井土、安井、真藤とこれに次ぐ六家。これらが従来どおりの方法で臨んだと思われる。

従って修猷館は講義形式が多く、素読、自読、遍読、会読、輪読の定めはあるが、「奪席」のような学生のやる気を促進する仕法はなかったようだ。これでは学生の緊張感に格段の差があったであろう。

しかし読書に当たっての姿勢の正しさ、文字の正確な読み、あるいはよそ見、手遊び、一人合点の勝手な読み方の禁止など、謹直、格正な学問の取り決めは、朱子学らしい折り目正しさである。甘棠館とは群を抜いていた。

※この項は早船正夫著「儒学者亀井南冥　ここが偉かった」(花乱社刊)から引用しました。

◇亀井南冥・昭陽全集の紹介◇

亀陽文庫は1978(昭和53)年から3年間余の歳月をかけ『亀井南冥・昭陽全集』全8巻9冊(葦書房)＝写真＝を刊行した。総計5千頁余りの編集を指揮した庄野寿人さん(1914～2000)＝前亀陽文庫理事長＝は、九州大学文学部の中国哲学史及び中国文学研究室に聴講生として入り、3年間にわたり亀門学の研鑽に励んだ。指導した教授は荒木見吾、岡村繁、町田三郎、林田真之介の各氏。

庄野さんは私淑する亀陽文庫創設者真藤慎太郎さん(1971死去・享年89)の遺志を継いでこの大事業をやり遂げた。福岡市出身の真藤さんは北洋漁業開拓者のひとり、日魯漁業副社長を務めた。

国宝金印のつまみ、ヘビかラクダか

朝日新聞編集委員
中村　俊介

国宝「漢委奴国王」金印が福岡・志賀島から発見されたのは天明4年（1784）のこと。弥生時代に福岡平野にあったという奴国の王が紀元1世紀、中国から賜ったとされる。

しかし、これほど謎が多い国宝も珍しい。百姓甚兵衛の口上書によると、田んぼでの作業中に出てきたというけれど、出土状況もいま一つはっきりしなければ、遺構も確認されていない。重要人物の墓に収められたのか、意図的に隠されたのか、はたまた海岸に漂着したものなのか。印影の読み方さえ通説の奴国ではなく、糸島半島あたりにあった伊都国とする意見も根強い。こんなミステリアスさも手伝って様々な臆測が生まれ、当時、福岡藩に相次いで設けられた藩校の甘棠館と修猷館が争う時代背景も絡んで、その発見劇にはドラマチックな筋書きがいくつも用意されることになった。

志賀島の国宝金印（レプリカ）

一時は鋳つぶされようとしたともいわれるこの珍品を、ときの碩学、亀井南冥が『後漢書』に登場する金印であると看破したのは、あまりにも有名なお話。つまり、金印が今この世にあるのは南冥のおかげといってもいい。ただ、これが本物ならば……だが。というのも、金印をめぐっては発見以来、今なお真贋論争が跡を絶たないのだ。最近も、古代文学者や技術史家らが江戸時代に日本で造られたものだとする贋作説を唱え、話題になっている。

ラクダをヘビに加工？

ところが、ひょっとすると真印説を補強するかもしれないユニークな説が登場した。福岡市埋蔵文化財調査課の大塚紀宜さんが主張する、印のつまみ（鈕）は元々ラクダの形だった、との説だ。なぜこれが真贋論争に一石を投じるかといえば、こうである。

金印の鈕（ちゅう）がとぐろを巻いたヘビをかたどっているのはご存じの通り。古代中国の王朝は臣下の証しとして外国に印をおくるとき、鈕にその土地の風土を反映させたといわれる。北の草原や砂漠地帯ならラクダや馬、南の湿潤地帯ならヘビといった具合。ところが大塚さんに言わせれば、このヘビの形、余計な出っ張りなどがあってどうもおかしい。鱗を表現する魚子模様が施された表面には、細かな線状の模様もかすかに見えるという。そこで下したのが、元々ラクダだった鈕を大急ぎでヘビに加工し直したから、という結論だ。

真贋論争に一石

理由は、中国側は倭国の地理を北方に想定していたが、使いの話でもっと南だということを知ったからでは、と大塚さんはみる。ということは、とんだ勘違いとはいえ、古代中国で造られたことには変わりなく、もしそうなら間接的ながら真印説の傍証になるわけだ。

大胆な説だけに、異論反論も出てきそう。一方で賛意を表明する研究者も現れ始めた。とにかく、袋小路の感もある真贋論争を、意外な視点からの刺激が久しぶりに揺さぶっているのは確かだろう。ますます目が離せない。

金印公園（福岡・志賀島）

中村　俊介（なかむら　しゅんすけ）
1965年、熊本市生まれ。早稲田大学教育学部地理歴史専修卒（中央アジア史・西域史専攻）。朝日新聞社に入社し、新潟支局、西部本社社会部、同学芸部、東京本社文化部（旧・学芸部）などで考古学・歴史、文化財、世界遺産、伝統工芸などを担当。現在、西部本社編集委員。日本考古学協会会員。
著書に『古代学最前線』（海鳥社、1998年）、『文化財報道と新聞記者』（吉川弘文館、2004年）、『世界遺産が消えてゆく』（千倉書房、2006年）。共著に『邪馬台国への道』（不知火書房、1995年）。

カメラルポ

〈能古中学校遠泳大会〉

▽7月23日（水）午前10時半スタート
▽福岡市西区小戸公園～能古島西海岸
▽直線距離1・5キロ
▽参加＝34人（男子21、女子13）
▽伴走＝能古島水上消防団8隻
※保護者ら乗船
手こぎボート4隻
ジェットスキー2台
▽伴泳＝ライフセーバー、卒業生、先生ら19人
▽天候＝晴れ　風＝微風
▽福岡市内の最高気温34・4度

プールでの練習と海での1回の試泳でこの日を迎えた

☆

梅雨が明けた。学校は夏休みに入った。能古中学校（福崎淳典校長）恒例の遠泳大会は今年で22回目。全校生徒52人の内34人が挑戦し、見事に泳ぎ切った。

かつては盛んに行われた博多湾の遠泳大会だが、埋め立てや汚染、事故への不安などで急速に姿を消した。だが能古中では衰えなかった。島の方々の変わらぬ熱意が運営を支える。

カメラで子どもたちの力泳ぶりを追った。

手をつないでフィニッシュラインへ

ゴールまであと5百㍍。前方に能古島

いよいよ海へ（小戸公園）

激励のエール。「遠泳は心も体も強くする」

能古島舞台に9月15日～29日
映画『なつやすみの巨匠』ロケ

9月15日から29日まで15日間の日程で能古島を中心にロケを行う。

これに先立ち8月16日、福岡市内で原作・脚本の入江信吾さん（福岡市出身）らが出席して製作発表イベント＝写真＝を開催、主要キャストを発表した。

子役5人は4月に福岡市で開いたオーディションで選んだ。10歳の主人公・シュンに野上天翔、ヒロイン・ユイに村重マリア。映画出演経験のない地元の5人に対し中島良監督はワークショップを定期的に開いて演技を磨いた。

大人の出演陣はシュンの父親に博多華丸、母親に国生さゆり、ユイの母親に板谷由夏が顔を揃え、リリー・フランキー、落合モトキが脇を固める。井上陽水の「能古島の片想い」がエンディング・ソングに決まった。

脚本第2稿によると、能古と姪浜の渡船場がしばしばロケの舞台になり、島の海岸、白髭神社、アイランドパーク、公民館などが登場する。能古博物館の玄関を飾る櫓（ろ）漕ぎ木造和船も寸景として描かれる。

入江信吾さんの話　能古島の皆さんのご協力をお願いします。福岡出身の俳優の皆さんは脚本を読んだ上で出演を快諾してくれました。

「海外引き揚げ」で平和授業

能古中の58人来館

能古中学校（福崎淳典校長）の生徒48人と先生10人が6月13日午後、平和授業のため来館した。テーマは「海外引き揚げ者の歴史と博多の関わりについて学ぼう」。

一行は日野原ホール（研修室）で黒田康介理事の背景説明を聞いた後、別館2階の常設展示「海外引き揚げの記憶」を中心に見て回り、永福寺境内の鎮魂碑にも足を伸ばして、宇賀一丈副住職の話を聞いた。45分間の駆け足授業だったが、生徒たちは未知の史実を知って驚きの表情だった。後日届いた感想文の一部を紹介しよう。

（注）文意が変わらぬ程度に文章をわかりやすく修正、短かくしています。

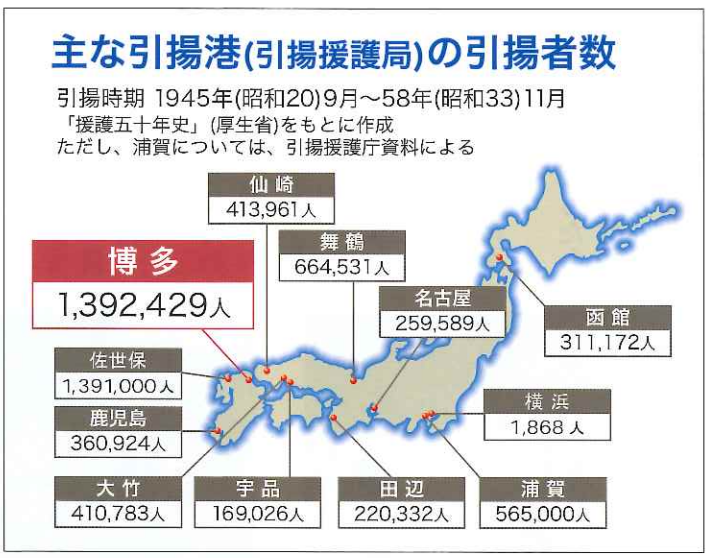
帰国者数全国一の博多港

〈感想A〉 日本各地に引き揚げ港はあったが、博多港の帰国者139万2429人は全国一。戦争で亡くなった能古島の人65人のうち64人は太平洋戦争で、残る1人は日露戦争で亡くなった。

〈感想B〉 博多の港があんなにも日本の復興に役立ったのかと思うと、なんだか誇らしくなった。黒田さんのお話で、中国人の大将の方（注・蒋介石）が発した声明『以徳報怨』があると聞き、国境を越えて他国民を思ってくれる指導者がいたのを知った。国籍は関係なく尊敬すべき存在だと思う。

（注）『以徳報怨』＝中国国民党政府の蒋介石総統が戦勝国民は謙虚であれと自国民に訴えた声明。

〈感想C〉 旧満州のコロ島から次々と引き揚げ船が到着して、能古島沖の検疫泊地に仮泊していたことを知ってびっくりしました。



博多港が僅差で佐世保港を上回って全国トップを記録した。
＝別館2階にて常設展示中＝

島民の戦死者65人に驚く

〈感想D〉 永福寺の鎮魂碑で、当時人口が約千人ぐらいだったのに戦争（日露戦争から太平洋戦争）で65人もの島民が亡くなられているのに、とても驚いた。今はとても平和でいい国だと思うので、2度と戦争がないようにしてほしい。

〈感想E〉 初めは能古島と海外引き揚げ者になんのつながりがあるのだろうかと、疑問に思っていたが、話を聞いてよくわかりました。

〈感想F〉 私は能古島に住んでいるにも関わらず、島の歴史を13年間もの間知りませんでした。

〈感想G〉 外にあった信号旗の意味が別館の2階に書いてあり、「NOKO MUSEUM」とわかり、感動しました。

〈感想H〉 引き揚げのとき、ごはんが少なく、日本を目の前にして死んでしまった人たちの話を聞き、その人たちがどんな気持ちでこの世を去ったのか気になりました。

〈感想I〉 これを機に能古や九州の歴史について、もっと知りたいと思いました。

〈感想J〉 帰国した人々の写真を見て、戦争はこの世にあってはいけないものだと改めて思いました。鎮魂碑にまつられている島の人々も好んで戦争のために亡くなったわけではないはずです。このような無意味な戦争をなくすために、いま私たちができることを考えるのが一番だと思います。

〈感想K〉 今の時代はとても幸せなのに、なぜ犯罪を犯すのか、物を大切にしないのかと思いました。

〈感想L〉 「昔」とちがって「今」は平和なんだなと改めて思った。中国とベトナムの船のぶつかりあいにいろんな国が出てきて、第3次世界大戦のようなことが起こらないようにしてほしい。

〈感想M〉 列車の屋根がなかったり、乗り遅れて置き去りになった話から、引き揚げが本当に薄氷を踏む旅だったことがわかった。

〈感想N〉 満州にいた日本人が帰国するために子どもを中国人に預けたり、福岡から北海道までほ

母のリュックに赤塚不二夫がしっかりつかまって、その不二夫に妹の寿満子がつかまって、綾子を背負った寿満子に宣洋がつかまって歩いた。母がどなった。「しっかりつかまるんだよ。放しちゃだめだよ」って。「中国からの引き揚げ　少年たちの記憶」より。＝別館２階にて常設展示中＝

どもある距離を歩いたり、平和な今ではあり得ないことばかりでした。

〈感想O〉（引き揚げ体験者の）漫画家赤塚不二夫さんが描いたリュックをかついで歩いて帰国するマンガにとても感動しました。一番下の妹が（帰国直後に）死んだとき、赤塚さんは「かわいかったころ死んでよかった」と書いていましたが、ぼくは絶対にそうだとは言えません。

〈感想P〉　赤塚不二夫さんもすごく悲しかったのだと思います。この悲しみや苦しみを二度と繰り返さないでほしい。

旧満州に潜行して惨状を撮影

〈感想Q〉　勇気のある引き揚げ者がもう一度現地（注・旧満州）にひそかに戻って、（悲惨な日本人孤児らの）写真を撮り政府に提出したら、アメリカが力を貸そうという動きになり、１９２隻もの船を貸してくれた。この船があったから多くの日本人は帰国できた。現地に行った人はすごいと思います。永福寺に戦場からの手紙が残っていたのもすごいと思いました。

〈感想R〉　今日の平和学習で一番印象に残ったのは永福寺の戦没者鎮魂碑を見たことです。

〈感想S〉　戦争は弱い者が巻き込まれて犠牲者もたくさん出る。ぼくだったら歩いて日本に帰ってこれない。自分でなくてよかったと思いました。

〈感想T〉　この学習から海外引き揚げ者の姿がうっすらと見えてきた気がします。

〈感想U〉　博多湾にたくさんの歴史があることが改めて分かりました。

〈感想V〉　69年前は私たちは生まれてない時代だけど、女性は男装までして引き揚げなければならなかったと知って、とてもかわいそうだと思いました。今に生きる私たちは平和を大切にして、命の尊さを考えながら過ごして行きたいと思います。

朝鮮から引き揚げた飯山達雄さん（写真家）は旧満州に残留した日本人の惨状を日本政府や占領軍総司令部（GHQ）に直訴するため、撮影機材を隠し持って引き揚げ船に便乗、コロ島から奉天（現・瀋陽）方面に潜行した。この母親の遺骨を抱く断髪の女の子はその1枚。飯山さんが持ち帰った多数の貴重な写真はGHQを動かし、引き揚げ用船舶の大量貸与につながったとされる。「小さな引き揚げ者」（飯山達雄・写真と文・草土文化社）より。＝別館２階にて常設展示中＝

「満州からの引き揚げ」テーマに
一橋大学・学園祭（11月）でシンポ

「終わらなかった戦争―満州からの引き揚げ」（仮タイトル）と題して関係者が話し合う。主催は一橋大学の大学院生を中心にした「満州の記憶研究会」。満鉄会から天野博之専務理事ら3人が出席する。開催日は11月2日（日）午後の予定。詳細は10月中旬に決定する。聴講希望者は主催者manshu-kioku@live.jpまたは満鉄会（電話03・3818・7520）に問い合わせる。＝満鉄会報第246号より＝。

×

中国引き揚げ漫画家の会が〝ダイジェスト版〟

本のタイトルは「もう10年もすれば　消えゆく戦争の記憶―漫画家たちの証言」＝（株）今人舎発行・税抜き定価1千8百円＝。

２００２年に同会のマンガ家赤塚不二夫、ちばてつや、森田拳次ら9人と特別参加の3人で世に問うた「中国からの引き揚げ　少年たちの記憶」＝（株）ミナトレナトス発行・税抜き定価8千円＝は好評のうちに絶版になったが、そのダイジェスト版を森田が中心になって本年6月出版した＝写真＝。作品は12年前の大型本71点から23点を選んで掲載。帯封には「今こそ中国を読もう。いまやっておかないと引き揚げ体験は永久に消えていく」とある。

以♥伝心
いしんでんしん

・2千人が詰めかける

○：能古島にアトリエを構え画業にいそしんだ故小谷修一さんの遺作展は5月の連休中、福岡市美術館の特別室で開かれ、2千人を超える来場者でにぎわった。妻寿子さんは作品52点を掲載した画集を5百冊作り、つてを頼りにマスコミ各社を回って協力を依頼した。「お陰で遺作の存在を多くの方々に知ってもらえた」と寿子さん。

会期中はふたりの息子さんが会場に詰めた。東京から駆けつけたテレビ局員の長男は「母はよくやりました」とねぎらった。小谷画伯の作品1点は別館1階で開催中の「谷口コレクション展」で9月28日（日）まで観賞できる。＝写真は寿子さんの説明を聞く友の会会員の上原孝正さん夫妻＝。

・82人が詰めかける

○：「夏季集落」。学校の夏休みの行事としての歴史は古い。校庭でキャンプファイアーをしたり肝試しをしたり。思い出す人も多いだろう。

能古小学校（山下真弓校長）では2年に1度の夏季集落を7月28日に行った。児童69人に先生、保護者など13人が参加。島内を巡るスタンプラリーでは初めて当館にも声が掛かり、能古焼古窯跡で全学年を対象にスタンプを捺した。＝写真＝。

この後、みんなは学校で夕食を取り、高学年は1泊して肝試しに興じた。

主な来館者（平成26年3月～同26年8月）

▽3月3日（月）九州大学中国文学研究室17人▽3月27日（木）能古老人クラブ・花見42人＝写真＝▽3月29日（土）句会「光円」17人▽3月30日（日）宇田川宣人九産大教授ら5人▽5月18日（日）城南区別府校区自治協けんこうウォーク40人▽5月24日（土）姪浜あこめ会73人▽6月13日（金）能古中学校・平和授業58人＝6、7ページに関連記事と写真＝▽7月4日（金）能古小学校・2年生12人

友の会新入会員の皆さん（敬称略）

佐藤 廉也、二本木 恵右、平野 公憲

「館便り」一挙にアップ　バックナンバー71冊、ホームページに

当館のホームページで館便りのバックナンバーをご覧になれます。この春、創刊号＝写真＝から第71号までの全ページをアップしました。創刊号は1989（平成元）年9月1日の発行。巻頭を谷口治達さん（九州造形短大教授）の「洋画家　多々羅義雄のこと」で飾り、当時の亀陽文庫理事長庄野寿人さんは連載「閨秀　亀井少栞伝（一）」の筆を執っています。

当館所蔵の亀門学を頂点とする古文書、書画は国内でも有数の学術資料ですが、関連の論文等が多数掲載された「館便り」は年間2～3回のペースで発行され、創刊から25年間のデータの蓄積は研究者から学生、一般市民に至るまでの多くの方々に、多大の便宜をはかるものと自負しています。

また島内外で産する鉱石類、貝類の標本、能古焼古窯跡、孔子廟などの館内施設や、五ヶ浦廻船、海外引き揚げ、ヨット青年牛島龍介などをテーマとする「博多湾物語」に関しても、多くのページが割かれています。

残念なことに全71冊の「総索引」は予算、人員の関係でまだ手付かずです。利用に便利なデータベースとして「総索引」の構築が急務になってきました。

能古博物館協賛ご寄附及び友の会（継続・新規）会員

（平成26年8月現在）

▼協賛ご寄附（法人）

・医療法人　笠松会　有吉病院
・税理士法人エム・エイ・シー
・エームサービス（株）
・医療法人社団江頭会　さくら病院
・（株）サンコー
・（株）CDS
・（株）筑紫不動産
・西日本シティ銀行　土井支店
・医療法人 西福岡病院
・医療法人 原三信病院
・（医）博仁会福岡リハビリテーション病院
・（株）ホームケアサービス
・（株）メディカルアシスト青葉
・医療法人恵光会　原病院

（個人）

出光 芳秀　上﨑 典雄　柏木 重人
久我 篁子　島塚 祐弘　原 敬二郎
舟越 茂義　増田 康治　翠川 文子
亀井 准輔　石野 智恵子　鈴木 友和
毛戸 彰　井本 敏明　仁保 喜之
朔 元則　添島 律子　多々羅 節子
寺田 隆　戸井 雅貴　原 寛
原 祐介

（敬称略・順不同）

協賛ご寄附のご案内

法人1口三万円×口数
個人1口一万円×口数
・税制上の「寄附金控除」の対象となります。

納入方法

1、郵便振替 01730・9・60970
公益財団法人　亀陽文庫

2、銀行振込
西日本シティ銀行 土井支店
普通 0551459
公益財団法人 亀陽文庫

▼友の会会員

注＝敬称略・五十音順・数字は会員歴（年数）

江口正一 ①　浦田裕一 ⑤　梅埜國夫 ③　内海眞記子 ⑩　宇都宮邦子 ④　内山節子 ③　牛島弘子 ③　上村八郎 ②　上原孝正 ⑨　上田博恒久 ⑲　上田久 ⑤　上蘭幸則 ④　上瀧玲子 ③　石清水由紀子 ④　岩城元 ③　岩尾通宏 ①　今村さち ⑧　今永一成 ④　井上昭義 ④　稲葉英彦 ④　出光豊 ④　井出美子 ②　市丸喜一郎 ⑳　板倉修二 ⑦　泉建志 ②　石橋亮介 ①　石橋善弘 ⑱　石橋治 ⑦　石橋延枝 ⑤　石橋哲治 ①　石橋清助 ⑰　石川経子 ②　石井福美 ③　池松幾生 ⑧　池田昌朗 ③　池田淳治 ①　池田修三 ⑱　有吉通泰 ①　有川優子 ①　新時弘 ③　阿部浩 ①　麻生芳正 ⑥　秋吉包雄 ④　秋山峻 ①　明石雄治 ⑤　大島照子 ⑥　大木茂幸 ③　大石恭仁子 ④　大由美子 ⑥　大宮作一郎 ①　小堀瑠伊子 ⑨

小坪美代子 ①　児玉玲子 ⑥　小坂セツ ④　古閑道子 ②　甲本達也 ㉔　熊谷達彦 ②　黒田明子 ⑦　久芳正隆 ⑮　國武英子 ⑤　清田美弥子 ⑥　木村忠夫 ①　木山啓子 ⑥　岐部安信 ②　鬼頭三 ⑤　木戸龍一 ④　城戸兼子 ③　吉瀬宗雄 ㉔　北原君子 ③　岸川伸子 ④　岸洋子 ㉒　木皿敦代 ⑩　河村敬一 ⑫　河鐵眞二夫 ②　河野道博 ⑤　白太郎 ⑤　嘉村正子 ⑪　柴本隼太 ③　柴田浩一 ⑩　柴戸次雄 ④　篠原ヨシ子 ⑩　篠田栄太郎 ⑥　釜我敏子 ①　金子月悦子 ⑱　香柏木和子 ③　塩田康文 ⑥　佐藤廉也 ⑥　小野﨑徹 ①　鬼崎雅子 ①　小倉智文 ①　荻原美枝子 ④　岡本顕實 ③　岡部九州生 ④　大庭浩司 ④　大智彩子 ③　小川玲子 ⑤　坂口和美 ①　榊征雄 ①　大塚健治郎 ①　合瀬武久 ⑥　境野俊男 ⑥　小山富夫 ⑮　小山京子 ④　小山儀一郎 ②　小宮山作 ⑥　小堀瑠伊子 ⑥

田坂大蔵 ④　田川義幸 ①　高山博光 ②　高松まり ①　高橋俊之 ①　高根襄 ⑩　高嶋俊光 ⑤　高嶋季雄 ②　高島英介 ③　副木いづみ ⑥　副島靖弘 ③　芦野広巳 ①　瀬戸美都子 ⑨　関敏巳 ⑤　関賢司 ⑥　住本直之 ⑨　霞 ⑨　図師祐子 ④　杉山謙 ⑤　杉原俊 ⑰　杉謙一 ①　進藤康子 ②　白太郎 ②　柴本隼太 ⑤　柴田浩一 ⑪　柴戸次雄 ④　篠原ヨシ子 ⑩　篠田栄太郎 ⑥　地頭所ミエ子 ①　執行敏彦 ⑨　塩田康文 ④　佐藤郁男 ①　佐々木ミノエ ①　佐々木二三子 ①　佐々木昭司 ①　櫻木榮紀 ①　坂梨喬さつ紀 ④　坂田虔二 ①　坂口征雄 ④　榊和美 ④　境野俊男 ⑥　小山富夫 ⑮　小山京子 ④　小山儀一郎 ②　小宮作 ⑥　小堀瑠伊子 ⑥

林由紀子 ①　林昌也 ⑤　林宏文 ②　林九楼 ③　濱崎須美子 ㉑　馬場浩太 ③　花田ひろ子 ⑥　服部たか子 ⑦　八田喜弘 ③　八田明美 ①　波多野洋子 ①　野村直之 ①　野武二 ⑤　信友浩一 ③　野崎逸郎 ⑩　二本木恵右 ⑲　西山紀子 ①　西牟田奈々 ⑦　西田靖子 ⑥　西川晴己 ⑤　西俊司 ③　成富睦夫 ⑨　成富耕志 ③　鍋島典子 ①　野口士朗 ②　中村保夫 ①　中野晶子 ⑩　中島怜子 ⑭　中塩喜吾 ④　中謙美子 ④　永淵郁子 ②　永岡喜代太 ⑳　平田康也 ①　平野公憲 ①　平川良輔 ⑦　平川好美 ⑤　姫野弘子 ④　富永靖雄 ⑥　富田富美子 ⑤　豊田文彦 ⑤　豊田郁男 ⑤　徳永武生・和子 ⑤　日野原重明 ③　原田雄平 ⑫　原田一男 ①　原坂和泰盛 ③　原口和子 ③　原祐一 ③　原律子 ①　原靖子 ⑦　原順子 ①　原順子 ⑤　原和美 ③　春野政虎 ③　早船正夫 ⑱

見沢照栄 ③　三浦佑之 ⑤　丸山敏子 ⑤　的野恭一 ⑥　松吉千鶴子 ③　松村美津子 ⑦　松等彰 ③　松﨑由紀子 ③　松熊友彦 ⑧　松岡智恵子 ⑦　松尾尚 ①　松尾城 ①　松井真典 ①　俊磨規 ⑮　真鬼枝 ⑥　増津子 ③　角志 ⑤　田和子 ㉔　柴田敏也 ⑥　前田敏子 ②　堀川大助 ③　星満智 ⑬　川映子 ⑤　古田靖子 ③　豊丹生昌義 ④　船津康幸 ③　藤田博司 ③　藤村信義 ③　藤瀬三枝子 ⑭　福山智美 ⑤　福元征四郎 ⑥　福孝三郎 ⑤　福冨節子 ⑤　福井和子 ⑤　廣田恵美子 ⑨　平原リヲ ①　平野公憲 ①　安本繁 ③　安井久喬 ③　安恒忠男 ⑤　安保博史 ⑥　森下昭子 ④　森正敏 ⑤　森東洋彦 ①　森純子 ⑥　森恍次郎 ④　杜あとむ ⑨　村岡健次 ③　宮崎美津子 ⑧　三宅碧子 ㉓　簑原聡 ⑨　三野原勝子 ⑩　南アサノ ⑥　三苫進 ⑦　三戸京子 ③　味園弘美 ②　水崎雄文 ①

渡辺彰 ②　和田宏子 ⑲　脇山玉枝 ③　若杉佳昭 ①　米倉満子 ④　吉安蓉子 ⑭　吉松須和子 ⑤　吉田洋一久 ⑦　吉田泰登 ⑥　吉田美代 ⑤　吉倉登美子 ②　結城威 ⑤　山本留美 ②　山本千恵子 ③　山田博子 ⑬　山田朋信 ⑳　山崎博司 ①　山下謙久 ③　山口勝 ①　山家肇 ②　山川淑子 ③　山川美也子 ④　矢野鈴子 ⑦　安松淳祐 ⑤　安保博史 ⑥　安恒忠男 ⑤　森本繁 ③　森下昭子 ③　森東洋彦 ④　森純子 ⑤　森恍次郎 ⑥　杜あとむ ④　村岡健次 ⑨　宮崎美津子 ③　三宅碧子 ⑧　簑原聡 ㉓　三野原勝子 ⑨　南アサノ ⑩　三苫進 ⑥　三戸京子 ⑦　味園弘美 ③　水崎雄文 ②　渡辺彰 ①

友の会入会のご案内

●友の会会費
1口　三千円
（何口でも可）

※会費の納入方法
郵便振替
01730・9・60970
公益財団法人 亀陽文庫

(1) 振込み料は当館が負担致します。

(2) 受付け次第、会員証とコーヒーチケットをお送り致します。

(3) 会費の有効期限は1年と致します。

(4) 入館時に会員証（ご同伴1名まで有効）を受付けにご提示下さい。ご入館は随意で回数制限はなく無料です。

(5) コーヒーチケットで挽きたての香り豊かなコーヒーをサービス致します。

(6) 「能古博物館だより」を年数回お送り致します。また会員の皆様のご寄稿、ご意見は同誌に掲載致します。但し諸事情で掲載を見送る場合がございます。予めご了承下さい。

(7) 館が企画する催物のご案内と参加費の割引きを致します。

アクセス

西鉄バス

・JR博多駅 博多口正面Aのりば
　300、301、302番 能古渡船場行：約50分

・天神 三越前1Aのりば
　300、301、302番 能古渡船場行：約30分

市営地下鉄：「姪浜駅」下車 乗り継ぎ

・西鉄バス姪浜駅 北口
　98番 能古渡船場行：約12分

・タクシー：約 8分

市営渡船（フェリー）

・姪浜一能古島間：約10分

能古島渡船場より博物館まで

・徒歩：約10分

・アイランドパーク行き西鉄バス停
「能古学校前」下車、徒歩（下り坂）約3分

問合せ

姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

開 館 日／毎週 金曜・土曜・日曜と祝日
※団体の場合は休館日にかかわらずご相談ください

（注）冬季（12月～1月）は、年末年始及び展示物入れ替えなどで長期休館を原則としています。御用の場合は事前にお問い合せ願います。

開館時間／10:00～17:00（入館16:30まで）

入 館 料／大人400円・高校生以下無料
※団体20名以上2割引

能古・姪浜航路 時刻表

	能古 発	姪の浜 発
1	◎05:00	◎05:15
2	06:00	06:15
3	06:30	06:45
4	07:00	07:15
5	07:30	07:45
6	08:00	08:15
7	09:00	09:15
8	10:00	10:15
9	11:00	11:15
10	12:00	12:15
11	13:00	13:15
12	14:00	14:15
13	15:00	15:15
14	16:00	16:15
15	17:00	17:15
16	17:30	17:45
17	18:00	18:15
18	18:30	18:45
19	19:30	19:45
20	20:15	20:30
21	20:45	21:00
22	21:45	22:00
23	◎22:45	◎23:00

◎印は日祝日運休　2013年11月現在

渡船場からアイランドパークへの西鉄バス時刻表（平成25年11月25日現在）

渡船場前発（能古学校前まで約２分）

時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18
平　日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
土曜日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	
日・祝日	57	48	45	30	30	55	35	35	35	45	00

アイランドパーク発（能古学校前まで約８分）

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平　日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
土曜日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
日・祝日	23	20	3	13	28	18	18	18	18	28	38

※ 繁忙期はバス、渡船とも臨時便が運行されます。

公益財団法人 亀陽文庫
能古博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2　TEL 092-883-2887　FAX 092-883-2881
http://nokonoshima-museum.or.jp　E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp